

研究者との交流

センターでさまざまな研究者と交流を持つことができたのも、留学の貴重な体験だった。留学中、イスラーム法廷記録を見るための特別なスペースには、私を含めて三人の「常連」がいた。一人はオーストリア人研究者で、カイセリという都市について調べていた。彼は私と同じく都市社会史に興味があったので、共通する話題も多く、作業の合間にチャイを飲みながら互いの成果を報告しあうのは、研



イスタンブールの様子(2008年筆者撮影)



イスタンブールにあるエジプト市場の様子(2010年筆者撮影)

帰国後の活動と現在

究上とても刺激になった。もう一人は年配のトルコ人研究者で、アラビア文字でメモを取るほどのオスマン語の達人であった。オスマン語であるうえに手書きのイスラーム法廷記録の判読は、トルコ人でも決して容易ではなかったが、彼に聞けばいつも即答だった。満足のいく史料調査ができたのは、彼のような「先生」のおかげであった。

二〇〇八年三月に留学を終えて半年ほど

たったのち、私は再びイスタンブールを訪れた。同年十一月に開かれる、第六回ウスキュダル国際シンポジウムで研究発表を行うためであった。このシンポジウムはイスラーム研究センターのあるウスキュダル区の主催で行われ、数日間に一〇〇人近い研究者が発表をする、トルコでも有数の学術的な催しである。私がそのような場で研究発表をするようになったのは、留学中にお世話になったオスマン帝国史の大家であるイスマイル・エリユンサル氏の誘いを受けたからであった。私にとって重要な経験であったことは間違いないが、何より自身の研究成果をトルコ語で伝えることで、それまでトルコでお世話になった人たちに対して、少しでも恩返しができるのではないかと思ひ、この誘いを快諾した。

現在、慶應義塾大学の教員として授業を行っている。研究を続けている。今の私があるのはイスタンブール留学という素晴らしい体験のおかげであり、その留学を支えてくれたのは、トルコで出会った人々や大学の先生方、家族、友人、そして国際文化交流財団の関係者の方々である。こうした人たちの支援があったことを忘れずに、研究と教育の双方に努力していきたい。

イスタンブール留学から 得たもの

慶應義塾大学文学部助教

藤木健二
ふじき けんじ

国際文化交流財団奨学生(二〇〇五年度)。〇四年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。一一年同後期博士課程単位取得退学。一一年より現職。専門はトルコ・オスマン帝国史、中東都市社会史。

留学の経緯

大学二年生のころ、東洋史学を専攻したものの、明確な研究テーマを決めかねていた。転機が訪れたのはトルコ旅行だった。イスラームの礼拝場であるモスクやにぎやかな市場(バザール)といった伝統的な街並み、そこでの人々の振る舞い、音や匂いまでもがとても印象的で、それらはどことなく共感できるものであった。そこでオスマン帝国期イスタンブールの都市社会を歴史的な視点から考え、研究することにしたのである。

いざ研究を始めると、本格的な研究には現地の資料を参照する必要があると痛感した。大学院に進学後、日本にある資料を用いる可能な限りのことをしてきたが、現地での

研究活動、留学への思いは募るばかりであった。やがて国際文化交流財団の奨学生に採用され、二〇〇五年、憧れのトルコ留学がついに現実のものとなったのである。

イスラーム研究センター

留学中、私はイスタンブールにあるマルマラ大学に所属し、授業に参加する一方で、資料の調査や収集に明け暮れた。イスタンブールには、あらゆる種類の資料が大学や古文書館、研究機関などに所蔵されているが、私が特に注目したのはイスラーム法廷記録である。イスラーム法廷とはオスマン帝国における都市の司法・行政機関であり、そこでは裁判や遺産相続、刑罰、物価、結婚・離婚などに関する日々の業務が事細かに記録された。近年、

●経団連国際教育交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。海外の大学・大学院に留学する日本人学生や日本に在籍する外国人留学生に対する奨学金の支給を通じて、わが国の学術研究や世界経済の発展に寄与するとともに、国際社会に貢献する人材を育成することを目的に活動している。

その利用環境が整備されるに伴い、都市史研究者たちの関心を集めている。

この資料を調査するため、留学中は多くの時間をイスラーム研究センターで過ごした。職員の方々は皆とても親切で、私の無理なお願いにもいつも快く協力してくれた。イスラーム法廷記録は、オスマン語(アラビア文字で書かれた古いトルコ語)によって書かれているため、解読には専用の辞書が必要となる。センターにも辞書はおいであるのだが、他の人も使用するので、一日中独占するわけにもいかず、私は毎日、自宅から数冊の分厚い辞書を持ち込んでいた。通い始めて半年ほど経ったころ、それを見ていた職員が、私の使っている辞書が何かを尋ね、まったく同じものを、いつも私が座る席の横に常備してくれた。そのおかげで、それまでウエートトレーニングのようだった私の「通学」は、劇的に改善されたのである。こうした利用者の個々の要望にも目を配るセンターの心遣いは、とてもうれしいものであった。